

『サード・プレイス』 ささき あり／作 フレーベル館（YFサ） 家でも学校でもない、第三の居場所が「サード・プレイス」というところ。そんな場所にやってきた瑞希、大輝、陽菜、亮の4人の物語。瑞希は、学校で本当の自分を出せないことに悩んでいた。しかし、ここでいろいろな人と交流を持つことで、自分らしくいることの大切さに気づく。そして、この場所は瑞希なくてはならない居場所となっていく。	『なぜ私たちは理系を選んだのか 未来につながる〈理〉のチカラ』 榎 太一／著 岩波書店（Y407ナ） 日本テレビのアナウンサーとして活躍していた著者は、大学などで生き物の研究をしてきました。そんな著者が、大学で理系を学び、現在さまざまな分野で活躍する7人に理系を選んだ理由をインタビューします。彼らが語る理系の魅力とは？	『カーネーション・デイ』 ジョン・デヴィッド・アンダーソン／作 ほるぷ出版（Y933カ） 慕っていた担任のピクスビー先生から癌をわずらっていることを知らされたトファー、スティーブ、ブランドの3人。予定していたお別れパーティーは、先生の入院が早まったためにできなくなる。このまま何もしないで先生とお別れをしたくない3人は、学校をサボってお見舞いに行くことを決める。道中さまざまなアクシデントにあいながらも、3人はどうにか先生のもとへと向かおうとする。	『ミシシippi冒険記』 ダヴィデ・モロジノット／著 岩崎書店（Y973ミ） 1904年のルイジアナ州。テ・トワ、エディ、ジョジュ、ティトの4人は、ある時、3ドルを手に入れる。このお金でピストルを買うことにするが、会社の手違いで壊れた懐中時計が届く。やがて、この時計に4000ドルという多額の保険金がかけて掛けていると知った4人は、大金を手に入れるために、シカゴにある会社まで時計を届けに行くことにする。旅を成功させ、大金を手にすることができるのか？	
『朔と新』 いとう みく／著 講談社（YFイ） 朔と新の兄弟は、仙台行きのバスに乗っていて事故に巻き込まれた。弟の新は軽傷ですんだが、この事故で兄の朔は視力を失ってしまう。これをきっかけに、新は中学から始めた陸上をやめ、高校生になっても部活にも入らず、走ることをやめてしまっていた。これを知った朔は、新にブラインドマラソンの伴走者になってほしいと頼む。はじめは断っていた新だが、事故に遭ったのは自分のせいだとも感じていたため、引き受けることにする。	『てのひらに未来』 工藤 純子／作 くもん出版（YFク） 中学生の琴葉の家には、17歳になる天馬という少年が居候している。彼女の父親が金属加工の工場を経営しており、そこで彼は15歳のころから働いているのだ。しかし、ある日、天馬が急に工場を辞めると言い出す。これをきっかけに、琴葉は15歳で家を出て働くことになった彼の複雑な家庭の事情を知る。そんなとき、天馬の父親が彼に会いたと琴葉の家を訪ねてくる。	『ボーダレス・ケアラー』 山本 悦子／著 理論社（YFヤ） 大学生の海斗は、夏休みの間、認知症で一人暮らしをしている祖母の面倒をみるようにと頼まれる。すでに亡くなっている犬の散歩に行くところを近所の人に見られ、一人で家にいることを心配されたからだ。問題の犬の散歩に祖母と出かけた海斗は、リードを持った瞬間に生と死後の世界の境目にいる「ボーダー」という存在が見えてしまう。ボーダーたちがこの世に何か思い残していることがあるのではと思った海斗は、この存在をケアすることを思い立つ。	『敗北を力に! 甲子園の敗者たち』 元永 知宏／著 岩波書店（Y783ハ） 野球をやっている人なら一度は出たいと思う「甲子園」。たったひとつの勝者を決める大会ですが、その陰には数えきれないほどの「敗者」がいます。彼らは、負けをどのように受け入れ、悔しい思いを力に変えたのでしょうか。8人の敗者へのインタビューから探ります。	
『わたしの町は戦場になった シリア内戦下を生きた少女の四年間』 ミリアム・ラウィック／著 フィリップ・ロフジョワ／著 東京創元社（Y302ワ） 内戦の激戦地となったシリアのアレッポでは、大変厳しい状況でも生き抜いてきた人々がいました。この本の著者のミリアムもその一人です。毎日のように爆撃がある中、彼女はどんな日々を過ごしていたのでしょうか。	『死にたい、ですか』 村上 しいこ／著 小学館（YFム） 高校生の由愛には、いじめが原因で自ら命を絶った兄がいた。母親はいまだに兄に固執しており、いじめの当事者たちに裁判を起こすことを決める。一方、父親は裁判には協力的ではない上にアルコール依存症になっており、社会生活を送るのもままならない状況にいた。由愛は、そんな今にも崩壊しそうな家族に必死で向き合おうとする。	『マイナス・ヒーロー』 落合 由佳／著 講談社（YFオ） 中学2年の海は、バドミントン部のエース。しかし、どんな大会に出ても準優勝ばかりで優勝まであと一歩及ばない。いろいろな理由でバドを続けられなくなった凧人は、そんな彼女をはがゆい気持ちで見ていた。ある時、海は彼に自分のアドバイザーになってほしいと頼む。凧人は部活のマネージャーになり、海をサポートすることを決める。	『強制終了、いつか再起動』 吉野 万理子／著 講談社（YFヨ） 新潟から東京の中学へと転校した隆秋は、クラスメイトとうまくいかないことや、勉強の進度の違いについていけないことに悩んでいた。そんなとき、家庭教師としてきていた大学生の安岡から、気分転換に自宅へ来てみないかと誘われる。そこで隆秋が目にしたのは、なんと「大麻」だった。安岡に大麻をすすめられた隆秋は、一回だけのつもりで手を出してしまう。	
『銀河鉄道の夜』 宮沢 賢治／著 集英社（YBFミ） 銀河のお祭りがある晩にジョバンニは外へ出かけた。すると、いつのまにか不思議な列車に乗り込んでおり、友人のカンパネラも同じ列車に乗っていることに気づく。二人を乗せた列車はどこへ向かうのか？	『キャラメル色のわたし』 シャロン・M.ドレイパー／作 鈴木出版（Y933キ） イザベラは黒人の父と白人の母のあいだに生まれ、肌はキャラメル色をしている。彼女自身は黒人差別をあまり意識しないで過ごしていたが、学校で黒人の友人に起きたことなどを通じて、自分自身のアイデンティティについて考えるようになる。そんなとき、誤って警察に拘束され、銃を向けられてしまうという経験をする。	『生きる』 谷川 俊太郎／詩 岡本 よしろう／絵 福音館書店（Eオ／イ） 谷川俊太郎の『生きる』という詩が絵本になりました。ある家族が過ごす夏の一日が描かれ、そこに詩が添えられています。「生きる」とは、何気ない日常の中にあるのだということに気づかされる本。	『たいせつなこと』 マーガレット・ワイス・フラウン／さく レナード・ワイスガード／え フレーベル館（Eワ） 身近にあるグラスやスプーンにだってそれぞれ大切なことがある。では、あなたにとって大切なこととは？	『ぼくのかえがきこえますか』 田島 征三／作 童心社（Eタ） ぼくは、戦争に行き、死んだ。そして、ぼくのかたきを討つと言って弟まで戦争に行き、死んでしまった。そんな二人を見送った母の思いとは？ また、戦争にいった「ぼく」には届けたかった声がある。それはどんな声だったのか？